

教員・保育者を志望する学生のカウンセリング的資質の学びに関する一研究 —箱庭制作を用いた共感的理解の学び—

春日 由美

Counseling Abilities of the Students in Education Department
- Learning of Empathic Understanding through Sand Play -
KASUGA Yumi

キーワード：共感的理解 カウンセリング的資質 教員 保育者 箱庭制作

要約：近年、教員や保育者にはカウンセリング的資質が求められ、その中でも共感的理解は重要な資質であると考えられる。本研究では、心理療法で用いられる箱庭の制作やその制作過程を見守ることで、教員や保育者を志望する学生の共感的理解やその前提条件と考えられる自己理解が促進されるかについて検討を行った。その結果、箱庭制作やその過程を見守ることは、学生の自己理解や他者への共感的理解、そして他者への配慮する態度を促すことなどにつながると考えられた。

1. 問題と目的

近年、様々な課題を抱える子どもたちやその保護者に対応するため、保育者や教員には、カウンセリング的な資質が必要と考えられている（浅見、2000など）。文部科学省の「幼児教育振興アクションプログラム」（2006）では、教員研修の改善・充実について、カウンセリングを含めた子育て支援等の課題に対応した研修内容への改善・充実を図られることが求められている。また保育者を対象とした調査において、石川ら（2009）の研究では84.6%の保育者がカウンセリング学習への関心を持っていること、井上ら（2006）の研究ではカウンセリング研修への参加希望が約9割であったことが報告されている。そして若林（2001）が保育士養成校を対象に行った調査から、養成校の91%がカウンセリングに関する授業を必要であると考えていることが明らかにされている。

ところで保育者や教員に求められるカウンセリング的資質の一つに共感が挙げられる。角田（1990）は、共感性を対人援助職的な職業に関わる人たちに求められる能力であるとしているが、共感とは相手との援助的なコミュニケーションを築く、きわめて重要な条件であると考えられる（上地、1990）。鈴木（2006）は文献を概観し、「共感

性」は教師に求められる重要な資質であることを指摘し、藤村（2010）は保育者特性尺度を作成し、保育者特性の一つに「共感性」があることを明らかにしている。そして井柳（1996）は「保育者の幼児に対する共感的理解は、保育者の役割の一つとして考えられている」とし、「保育者の全ての援助の大前提として、まず共感的理解が必要である」と述べている。このように共感や共感的理解は保育者や教員にとって、欠くことのできない資質であると考えられる。

では保育者や教員に必要な資質としての共感や共感的理解とはどのようなものであろうか。久芳（2003）は教師の教育相談における共感について「相手の立場に立った理解」と述べている。保育者の共感的理解について検討した井柳（1996）は、共感と同情は異なるとし、「真の共感とは（中略）ただ同じ気持ちを共有することではない。互いに相手の立場、互いの相違を尊重した上で、心と心を響き合わせて相手を理解することである」と述べている。また笠井（1999）は保育者の共感的関係について、「多種多様である人間の心を完全に分かることは不可能」であり、「大切なのは、他者の異質性を認め受け入れようとする心であり、そういうことを心がけて努力すること」と述

べている。これらから保育者や教員に必要なカウンセリング的な共感とは、単に気持ちを共有するというだけでなく、自分とは異なる相手を受け入れた上で分かろうと努力する態度であると考えられる。つまり「理解」という言葉を用いていなくても、共感という場合には相手を理解しようとする態度（共感的理解）が重要であると考えられる。このように保育者や教員にとって共感的理解の資質は重要であると考えられるが、秋政ら（2009）は保育者の養成課程や研修等で共感性そのものを高めることを第一の目的にしたものは少ないと述べている。

そして上地（1990）は生徒理解の前に、まずは教師の自己理解が必要であることを指摘しており、津守（1979）は保育者、教師が子どもに接する態度について、「教師の心の中にあるさまざまな感情や悩みが受容されて、はじめて客観的にみることができるようになる」と述べている。また角田（1990）は、共感発達の初期の一次的共感とその後の二次的共感が想定できるとし、成人レベルの二次的共感が成立するには、自他の個性の認識が必要であると述べている。これらのことから保育者や教師が子どもを共感的に理解するためには、その前に自己についての理解（自己理解）が必要であると考えられる。

以上のことから今後は、保育者・教員の資質として重要な共感的理解や、その前提条件と考えられる自己理解を、どのような方法で身につけたり深めたりすることができるのかについて検討していくことが必要であろう。しかし共感的理解は講義形式の授業や研修で身につけることは難しいと考えられる。鈴木ら（2007）は教師の共感性を向上させる研修として、ラボラトリー方式の体験学習（小グループでのコミュニケーションやグループワークでの体験を素材にした学習）について報告しているが、今後は鈴木ら（2007）のように体験を伴った学び方について検討することが必要である。

そしてこのような学びの一つとして、心理療法で用いられる箱庭を用いた学びが報告されている。例えば竹松（2000）は教職志望学生を対象とした箱庭制作体験を用いたカウンセリングマイ

ンニング講座について報告し、番匠（2009）は保育者養成コースの学生を対象とした箱庭療法体験を報告している。この箱庭療法とはカルフが創始し、河合隼雄が日本に紹介したものである（岡田、2008）。箱庭制作の方法は、砂の入った木箱（57cm×72cm×7cm）に人間や動物、建物や樹木、乗物など様々な玩具を自由に選びながら作品を作っていくというものである。箱の中は水色に彩色されており、砂を掘るなどすることで、海や川などの水を表現することもできる。また砂に触れることで適度な心理的退行を促すと考えられている（木村、1985）。

藤岡ら（2012）は大学生を対象に、箱庭制作を用いた自己理解の促進を目的とする研究を報告しているが、楠本（2013）は箱庭療法が、心理的に健康な人々の自己実現や自己理解の促進のために行われることもあると述べている。そして岡田（2008）は、箱庭について箱庭の作品を作りながら、自分のことや悩みなどを考えるクライアントが多くいるとし、「言語化できないから、イメージで、たとえば箱庭の作品でクライアントの気持ちや考えなどが表現されたとも言える」と述べている。このように箱庭の制作は、普段言語化できていない部分も含めた自己についての理解を促進させることが予想される。

そして千葉ら（2006）はこれからの保育において、絵画療法や箱庭療法などの理論が、保育士が持つ潜在的な共感能力を「子どもの心のケア」に結びつけると指摘している。心理療法における箱庭療法では、セラピストが傍らで見守る中でクライアントが作品を作る。水野ら（2004）はこの箱庭制作を、言葉にならない自己表現としているが、遠藤ら（2011）は作られた箱庭作品だけでなく、箱庭の制作行動も非言語的表現であり、制作者の理解のために貴重な手がかりを与えてくれると述べている。このように箱庭においては、制作された作品を見ることで制作者の非言語的のものについて理解を深める手がかりになることが考えられる。またその制作過程を傍らで見ていることで、作品を作りながら刻々と変化する制作者の心の動きを想像しやすいと考えられる。

また岡田（2008）は、箱庭療法は玩具を使って

作品を制作することによって、自分の世界を示し、その制作者の世界（作品）をセラピストが受け取るというコミュニケーションをしていると述べている。そして小野(2002)は箱庭では治療者によってクライアントがどれだけ受容され、どれだけ理解され、どういう関係が作り出せるかによって、箱庭は変化すると述べている。同様に久米(2011)は、箱庭の見守り手の役割として、作り手が安心して自分に向き合える空間をつくるのが、内的な感覚や体験を活性化させ、心が動いている過程にある作り手を抱えるために非常に重要であると指摘している。このように箱庭の制作過程では制作者と見守る者との非言語的な相互交流が起こっており、制作者が見守る者により受け止められている、理解されているという感覚を持つことができるかどうか、制作者が安心して自己に向き合うことにつながると考えられる。

以上のように、箱庭制作は自己理解を促進することが考えられ、また他者の箱庭制作を見守ることにより制作者への共感的理解を促進することが予想される。そこで本研究では、箱庭制作とその過程を見守る体験が、学生の自己理解と共感的理解の促進につながるかについて検討する。

2. 方法

(1) 対象者

対象者は「臨床心理学」の授業を受講する教育学系の学部4年生16名（男性3名、女性13名）である。この学部では保育士・幼稚園教諭・小学校教諭の資格・免許を取得することができ、子どもに関わる仕事を志望する学生が多い。

(2) 方法と期間

箱庭制作は授業の一環として行った。期間は2013年7月である。筆者がまず事前に学生をランダムに2名ずつのペアに分けた。そしてペア毎に時間を設定し、2名だけで箱庭制作を行ってもらった。制作の直前に、制作手順や見守り方について、口頭と文書で説明を行った。箱庭制作の手順の概略について表1に示す。ペアでの制作直後に、臨床心理士である筆者による心理的フォローの意味も含めて、各ペアに筆者を加えた3名で箱庭制作についての振り返りを行った。なお本研究

では制作者のことを「作り手」とし、見ている者のことを「見守り手」と表現する。振り返りの後、授業の一環として学生は筆者が作成したワークシートへの記入を行った。調査はこのワークシートのうち、研究への協力を許可した学生のものを用いているが、研究への協力は授業とは関係なく自由であり、調査への協力が成績に影響しないこと、データは研究の公表においては個人が特定されないことを文面・口頭で説明を行った。なおペアでの箱庭制作以前に、授業中に箱庭療法について解説し、学生たちの前で1名の学生が箱庭を制作し筆者が傍で見守るというデモンストラクションを行っている。

表1. 箱庭制作手順

①初めの作り手と見守り手を決める。
②見守り手が、作り手が作りやすいように箱庭の砂や玩具を整える。
③作り手が箱庭を制作する。見守り手は作り手が安心して作ることができるよう配慮し見守る。作り手のころの動きをできるだけ想像しながら見守る。
④制作後、少し質問や感想などお互いに伝えながら、2人で作られたものを味わう。
⑤作り手と見守り手の役割を交代し、①～④を行う。

(3) 調査内容

ワークシートの内容を表2に示す。調査内容のうち、「作り手役割の時」①～⑤、および「見守り手役割の時」①～⑤は「あてはまる」から「あてはまらない」の4件法で記入してもらった。またその他の項目は自由記述とした。

3. 結果と考察

(1) 選択式項目への回答

「作り手役割の時」①～⑤、および「見守り手役割の時」①～⑤の結果について、表3に度数と平均値示す（得点範囲は1～4点）。いずれの項目も平均値が3点以上であった。「作り手役割の時」①の平均値が3.63点、②の平均値が3.25点であったことから、箱庭制作は自己理解を促進することが考えられる。「作り手役割の時」③の平均値は3.75点、④は平均値が3.94点であったこと

表2 箱庭制作ワークシート

作り手役割の時	
①	箱庭をつくることで、普段よりも感じたり、考えることが出来た。(4件法)
②	自分について新たな発見があった。(4件法)
③	作っている最中、見守り手に受け止められている感じや見守られている感じがした。(4件法)
④	作り終えた後、箱庭や自分のことを、見守り手に受け止めてもらえたり、理解しようとしてもらった感じがした。(4件法)
⑤	作り終えた箱庭を、見守り手と二人で味わえた感じがした。(4件法)
⑥	自分が箱庭を作っている最中、あなたはどのようなことを考えたり、思ったりしましたか。(自由記述)
⑦	自分が作り終えた箱庭を見て、あなたはどのようなことを考えたり、思ったりしましたか。(自由記述)
⑧	自分が箱庭を作っている時や、作り終えて見守り手と二人で箱庭を見ている時、あなたは見守り手に対してどのようなことを考えたり、思ったりしましたか。(自由記述)
見守り手役割の時	
①	作り手に対して普段よりも感じたり、考えることがあった。(4件法)
②	作り手について新たな発見があった。(4件法)
③	作っている最中、作り手を受け止めようとしたり、理解しようとすることができた。(4件法)
④	作り終えた後、箱庭や作り手のことを、受け止めようとしたり、理解しようとすることができた。(4件法)
⑤	作り終えた箱庭を、作り手と二人で味わえた感じがした。(4件法)
⑥	作り手が作っているのを見ていて、あなたはどのようなことを考えたり、思ったりしましたか。(自由記述)
⑦	作り手が作り終えた箱庭を見て、あなたはどのようなことを考えたり、思ったりしましたか。(自由記述)
⑧	作り手が箱庭を作っている時や、作り手が作り終えて二人で箱庭を見ている時、あなたは作り手に対して、どのようなことを考えたり、思ったりしましたか。(自由記述)
箱庭を作る・見守る体験全体を通して	
①	箱庭を作る・見守る体験をして、感じたことや考えたことがあれば自由に書いてください。(自由記述)

から、箱庭制作中や制作後に二人で作品を味わう際に、見守り手に自分を受け止められる感覚や理解されようとした感覚を学生が実感したと考えられる。また「作り手役割の時」⑤の平均値は3.88点であり学生は自分の作った作品を見守り手とともに味わうことが出来たと感じたと考えられる。「見守り手役割の時」①～⑤全ての平均値が3.75点であり(「あてはまる」12名、「少しあてはまる」4名)、箱庭制作を見守る体験は、他者理解や他者受容の促進、そして他者への共感を促すと考えられる。

(2) 自由記述項目への回答：

「作り手役割の時」⑥～⑧、「見守り手役割の時」⑥～⑧、「箱庭を作る・見守る体験全体を通して」の自由記述の内容を分類したものの抜粋を表4～

表3 各項目の度数と平均値

	番号	あてはまる				平均値
		あてはまる	少しあてはまる	あまりあてはまらない	あてはまらない	
作り手役割の時	①	11	4	1	0	3.63
	②	6	8	2	0	3.25
	③	12	4	0	0	3.75
	④	15	1	0	0	3.94
	⑤	14	2	0	0	3.88
見守り手役割の時	①	12	4	0	0	3.75
	②	12	4	0	0	3.75
	③	12	4	0	0	3.75
	④	12	4	0	0	3.75
	⑤	12	4	0	0	3.75

注) 平均値は「あてはまる」4点、「少しあてはまる」3点、「あまりあてはまらない」2点、「あてはまらない」1点で計算した。

6に示す。

1) 作り手役割の時(表4)

「作り手役割の時」⑥では、「自分に対する意識」「見守り手に対する意識」「箱庭についての考え」「箱庭制作の振り返り」に関する内容が記述された。「自分に対する意識」では、箱庭を作り始めると集中し、落ち着いて箱庭を作っている様子が書かれていた。また自分を見つめることができたなど自己理解に関する内容が書かれていた。「見守り手に対する意識」では、見られていることによる恥ずかしさや緊張も書かれていたが、その後気にならなくなったという記述や、受け止めてくれて安心して箱庭を制作したという記述が見られた。「箱庭についての考え」では、自分の中でどのように作るかをイメージしながら制作している様子が書かれていた。「箱庭制作の振り返り」では、何を置くかやどこに置くかについての迷いも書かれているが、概ねありのままを表現出来たり、楽しんで玩具を置いていくことができた様子が書かれていた。これらのことから、箱庭制作の最中、作り手は箱庭制作に集中し、自分の内面でイメージを膨らませたり、自分について考えながら、玩具を置いて行ったと考えられる。一方で見られている恥ずかしさや玩具を置くことへの迷いがあった者もいると考えられた。

「作り手役割の時」⑦では、「自分の気持ち」「箱庭作品と自分を関連づけた感想」「箱庭作品の感想」に関する内容が記述された。「自分の気持ち」では、箱庭制作により気持ちが落ち着いたり、満足感を味わったなどの記述が見られた。「箱庭作品と自分を関連づけた感想」では、箱庭作品を見ることで、今の自分を客観的に理解する内容の記述が見られたり、自分を表した作品になったという感想が書かれていた。「箱庭作品の感想」では、「こんな世界も悪くないと思った」「ちゃんとした風景画のようにになっているなあ」「初めに頭の中では想像していたものとは全く違った」など、自分の作品であるが、客観的に感想が述べられていた。これらのことから、自分の箱庭作品を見ることにより気持ちが落ち着いたり、自分を客観的に眺めることにつながると考えられた。

「作り手役割の時」⑧では、「見守られる感覚」

「共感・受容される感覚」「見守り手への意識」に関する内容が記述された。「見守られる感覚」では、見守り手がいることにより集中したり、楽しく作ることができたという内容や、「見守られていると感じるような不思議な感覚」と書かれており、見守り手の存在が箱庭制作に対して肯定的なものとして受け止められている記述が見られた。「共感・受容される感覚」では、「分かってもらっている」「分かってくれた」という記述や「共感してくれた」という記述が見られ、またそれが「嬉しかった」という内容が書かれていた。「見守り手への意識」では、見守り手に分かってほしい、共感してほしいという記述が見られた。また見守り手がどんなことを考えているかが気になったり、「心の中を見られているみたいで、少し恥ずかしかった」などの記述が見られた。しかし見守り手がいることでの安心感や達成感も書かれていた。これらのことから作り手は見守り手に対して、恥ずかしさを感じることもあるが、見守り手に共感・受容してもらえたという感覚や、分かってほしいという気持ちを持つことが考えられ、概ね見守り手がいることで箱庭制作が有意義になると感じているのではないかと考えられた。

2) 見守り手役割の時(表5)

「見守り手役割の時」⑥では、「作り手の内面への想像」「作り手理解」「作り手と自分との関連・比較」に関する内容が記述された。「作り手の内面への想像」では、制作過程を見ながら、作り手が考えていることを想像している様子が書かれていた。「作り手理解」に分類した内容では、制作過程と作り手の性格を関連させて考えている内容が書かれていた。「作り手と自分との関連・比較」では、制作過程から、自分との違いを感じている様子が書かれていた。これらのことから見守り手役割をすることは、作り手の内面を想像したり、作り手や自分について考えを深めることにつながると考えられる。

「見守り手役割の時」⑦では、「作り手の内面への興味・想像」「箱庭作品と作り手を関連づけた感想」「箱庭作品の感想」に関する内容が記述された。「作り手の内面への興味・想像」では、どのような気持ちで作ったのか等、作り手の意図な

どへの興味や、作り手の話を聞くことで自分も作り手のイメージを共有した内容が書かれていた。「箱庭作品と作り手を関連づけた感想」では、作品制作と作り手を関連づけて、制作の達成感や、作品から感じる作り手らしさや、逆に作り手への見方の変化などの記述が見られた。「箱庭作品の

感想」では、作品に対してストーリーや順序、まとまりなどを感じたり、制作過程での変化についての記述や自分自身心が和むなどの記述があった。これらのことから箱庭作品を見ることで、作り手の内面を想像したり、理解することが促されると考えられた。

表4 「作り手役割の時」の自由記述の内容 (抜粋)

<p>⑥自分が箱庭を作っている最中、あなたはどのようなことを考えたり、思ったりしましたか。</p> <p>自分に対する意識：始める前は緊張していたが、作業に取り掛かると、あれを置きたいこれも置いてみようという無我夢中で取り組んでいた。作っている間は、周りも気にならず、楽しかった。作っている最中は、箱庭に集中でき砂の手触りなども良く心が落ち着いていた。自分のイメージの世界について考えることが出来て、普段はイメージや心の中を考える余裕がないので、自分自身を見つめることができたような気がした。</p> <p>見守り手に対する意識：作りはじめは見られていて恥ずかしい気持ちが少しあったけど作っていると夢中になりあまり気にならなくなった。非現実的に作っても、驚いたり、嫌な表情をしたりせず受け止めてくれていたので、安心して(中略)箱庭を作ることができた。見られているということで、少し緊張した。</p> <p>箱庭についての考え：自分が行ってみたい世界をイメージしながら作った。どこに置こうかなと考えながら、あまり現実ではありえないような世界をイメージしながら作った。自分の理想とする感じをイメージしながら作った。少し非日常的な“いやし”が欲しかったので、人工的な建物などは避けた。何をつくろうかあまり考えていなかったけど作りだしたら、ここに置いてみようかなと思ったり、おだやかな感じにしたいなと考えたりすることができた。</p> <p>箱庭制作の振り返り：どんなものを置こうか、どこに置こうか迷った。頭の中でイメージしたやつとは違う方向に進んでしまっていたが、納得のいくものができたと感じた。ありのままを表現することができたと思う。やっているうちにどんどんイメージが出てくるので、楽しんで取り組むことができた。一つの物が置けると次に何を置こうか悩まなくても、すんなりと置くことができた。</p>
<p>⑦自分が作り終えた箱庭を見て、あなたはどのようなことを考えたり、思ったりしましたか。</p> <p>自分の気持ち：落ち着き気持ちになった。こんなところに早く行ってみたいと思った。作り終えたという満足感を味わうことができ、少し心が軽くなったような気がした。作り終わって、試験のことや就職のことなどいろいろたいへんだと思っていたことが、落ち着いて考えていこうと思えるようになってきた。</p> <p>箱庭作品と自分を関連づけた感想：全体を見たときに自然の物が多かったので、自分は今満たされたいのかなと感じた。自分は、今の状況から早く抜け出したいのかあと思った。自分はこういう風景の物が作りたかったのかと思って新たな発見となった。非現実的な世界だけど、自分の願望がたくさんつまっていた作品ができたと思った。「私のイメージってこんな感じなんだ」と少し他人事のように思っ箱庭を見ていた。</p> <p>箱庭作品の感想：こんな世界も悪くないなと思った。最初は何も考えずに作っていたが、作り終わって全体的に見ると一つにまとまっていて、ちゃんとした風景画のように感じていると感じた。私が初めに頭の中で想像していたものとは全く違ったので、とてもびっくりした。現実ではありえないような世界を表現できて、(中略)自由な表現ができると思った。</p>
<p>⑧自分が箱庭を作っている時や、作り終えて見守り手と二人で箱庭を見ている時、あなたは見守り手に対してどのようなことを考えたり、思ったりしましたか。</p> <p>見守られる感覚：「見守られている」という感じだったので集中して自分の世界に入り込むことができた。一人の空間で作っているという感じではなく、見守られていると感じられるような不思議な感覚だった。自分の作った風景にとっても興味を持って色々な質問をしてくれたので見守ってくれたと実感した。見守り手がしっかり見てくれたから楽しく箱庭をつくる事ができたなと思った。</p> <p>共感・受容される感覚：「ここはこうなっているんだ」という声かけをしてくれたので、私のことを分かっていてくれるように感じた。自分が工夫して作った所に「すごい」や「これは?!」というふうにコメントがもらえた時、自分の気持ちを分かってもらえたような気がして嬉しかった。作り終わった時に自分がどんな感じに作ったかを言うと、しっかりと共感してくれて受け入れてくれると思った。見守り役の人が一緒に共感してくれたり、感想を言ってくれたので、安心したし、とても嬉しかった。</p> <p>見守り手への意識：自分の作っているもの、表現したいものは何なのかを分かってもらいたいと思った。自分の作っている作品と一緒に味わってほしい、共感してほしいと思った。自分が作った箱庭を見て、どんなことを考えているのだろうか気になった。自分の心の中を見られてみたいで、少し恥ずかしかった。見られていることに最初は恥ずかしい気持ちがあったが、安心感へと変わっていったような気がした。作っている最中は見守り手のことがほとんど気にならなかった。一人で作っているよりも、誰かがいてくれた方が安心できるし、感想を言ってもらえるので達成感があった。</p>

注) スペースの都合上、自由記述の語尾は全て常体に統一した。

「見守り手役割の時」⑧では、「作り手の内面への想像」「作り手への理解・共感」「作り手への配慮」「見守り手としての感想」「作り手と自分との関連・比較」に関する内容が記述された。「作り手の内面への想像」では、作り手の様子や表情を見ながら、作り手の内面を想像している記述が見

られた。「作り手への理解・共感」では、作り手を理解しようとしたり、受け入れようとしたりする様子が書かれていた。「作り手への配慮」では、作り手が作りやすいようになどを考えながら、自分がどのようにしたらよいかを考えている様子が記述されていた。「見守り手としての感想」では、

表5 「見守り手役割の時」の自由記述の内容（抜粋）

<p>⑥作り手が作っているのを見て、あなたはどのようなことを考えたり、思ったりしましたか。</p> <p>作り手の内面への想像：カメラ魚が置かれていったので、自然豊かなところをイメージしているのかなと思った。表情が真剣だったけど、とても楽しそうに作っているなと思った。手に持ったものをほとんど迷うことなく置いていたので、自分の中のイメージがあるのかなと思った。人を置く時、表情などを見ながら悩んで選んでいるなあと考えた。作り手が今どんなことを感じているのか、どのような世界をイメージしているのかを考えながら見ていた。</p> <p>作り手理解：箱庭に置くものを選ぶとき、一つ一つよく見ながら選んでいたのも、慎重な面もあるのかなあと考えた。最初から勢いよく作っていたので○さんらしいなと思った。最初に自然のものを作り始めた時は、意外だなと感じた。普段はあまり話さないで、「こういう作品を作るんだ」と意外な感じがした。こんなのを作ったから、作り手はこんなじゃないかなど、作り手について新たな発見があった。</p> <p>作り手と自分との関連・比較：自分が作るのとは全然違う雰囲気のものだったので、作り手が何をどう作るのか違う世界観が見れた感じがした。自分とは対照的に最初はあまり考えず、どんどん配置していたので、そこから個性が出ると思った。自分の想像していたのと違う作り方を展開していくので、人それぞれ個性が違うなというのを改めて感じ、人を見ることはおもしろいなと感じた。</p>
<p>⑦作り手が作り終えた箱庭を見て、あなたはどのようなことを考えたり、思ったりしましたか。</p> <p>作り手の内面への興味・想像：どのような気持ちで作ったのかということがとても気になった。自分の理想を作ったのか、自分の地元をイメージしたのかなど気になった。自分の中のストーリーも広がっていろいろ聞いてみたいと思った。作り手がどんなことを想像しながら作っていったのか聞いて自分も何となく作り手のイメージが想像できた。</p> <p>箱庭作品と作り手を関連づけた感想：作った物を説明している時には達成感のようなものも見られた。作り手らしいユニークな作品だと思った。箱庭を通して作り手のおだやかで優しい雰囲気がよく伝わってくるなと思った。いつもその人の見方が変わった。私の思っているよりもっと自然体で自由な感じの人なのかなと思った。</p> <p>箱庭作品の感想：きちんとしたストーリーがあると思った。きちんとした順序のようなものがあると思った。全体がまとまっていると感じた。ゆったりと時間が流れている雰囲気だった。見ていて心が和んだ。箱庭は様々な世界観が混ざって見ていて楽しかった。最初と比べると大きく変化してておもしろいと思った。</p>
<p>⑧作り手が箱庭を作っている時や、作り手が作り終えて二人で箱庭を見ている時、あなたは作り手に対して、どのようなことを考えたり、思ったりしましたか。</p> <p>作り手の内面への想像：自分のイメージする風景を作れたようで、とても満足していると思った。何を置こうか迷っていて、迷うということは、自分の中で何かイメージを持って取り組んでいるのだろうなと考えた。作る前は少し難しそうと思っていたように見えるけど、作り始めると楽しそうで、終わるととてもすっきりしているような気がした。</p> <p>作り手への理解・共感：作り手の表現の意図を理解しようと思った。作り終えてからもあまり質問することなく、目の前の世界をありのまま受け入れ、作り手から出てくる言葉に共感することができた。一緒に共感したり楽しむことはできたのでよかった。</p> <p>作り手への配慮：作り手のじゃまにならないように気をつけていた。視界にもあまり入らない方がいいのかなあと考えた。2人で見ると、相手のことを受け入れようと思えば相手は話してくれることを聞いた。出来るだけ落ち着いた雰囲気でも私に気が散ることがなく且つ見守られているという安心感を感じながら作れるようにしてあげたいと思った。作り手はこの箱庭のどこに注目してほしいのかという所を考えながら、作り手の箱庭を見ていた。</p> <p>見守り手としての感想：次は何をどこに置くのだろう、とわくわくしながら見ていた。見ているだけだったけど、いつもと違う雰囲気だからか、なぜか最初の方は緊張していた。こちら側の質問に対しても楽しそうに答えてくれたので、見守り手としてもやりやすかった。その人がどんなことを感じたり、考えたりしながら作ったのか聞いて、このような違う一面が見れたりするのでおもしろいと感じた。</p> <p>作り手と自分との関連・比較：自分では想像もつかなかったものを作ってくれてすごいと思った。自分は型にはめすぎてたし、枠にとらわれすぎていたなと考えてしまった。自分はやる前に悩んでしまうことが多いけど、相手はやってから悩んで変えていく人なのだと感じ、自分もそういう考え方を見習いたいと思った。普段あまり接することがないけど、想像力、発想力など自分とは違う一面があり、新たな発見ができたと感じた。</p>

注) スペースの都合上、自由記述の語尾は全て常体に統一した。

自分が作るわけでないが、見守り手の心もわくわくしたり、緊張したりする様子など見守り手としての自分の心境が書かれていた。「作り手と自分との関連・比較」では、自分と比較し、相手を評価したり、相手への新たな発見に関する記述が見られた。これらのことから見守り手の時に学生は、作り手の内面について想像を巡らせたり、相手を理解・共感しようとしたり、配慮しようとするなど、ただ見ているだけでなく、「見守る役目」を果たそうとしていたことが伺われる。また箱庭や作り手を見ることで、作り手と自分を比較して考えたり、面白さを感じたりしていると考えられた。このように見守り手として箱庭の制作過程や作品を見ることは、作り手理解につながると同時に、自分自身が作り手に対して積極的に配慮しようとしたり、理解・共感しようとする態度を促進すると考えられた。また見守り手も楽しさや緊張を味わったり、自分と作り手を比較して考えるなど、見守り手の心の変化や自己理解を促すことが考えられた。

3) 箱庭を作る・見守る体験をして、感じたことや考えたこと (表6)

「箱庭を作る・見守る体験をして、感じたことや考えたこと」では、「自己理解の促進」「他者理解の促進」「被受容体験」「相手への配慮・意識」「両方の役割を体験する意義」「箱庭制作の感想」に関する内容が記述された。「自己理解の促進」では、箱庭を制作することで、改めて自分について考えたり、整理できたという内容が書かれていた。「他者理解の促進」では、見守る体験により相手に対して新たな発見をしたり、相手の気持ちに近づくことができたなどの記述が見られた。「被受容体験」では、見守り手がいることで、安心する様子が書かれていた。「相手への配慮・意識」では、見守り手や作り手になることを通して、相手にどのように配慮すればよいかを考えたり、相手の思いを意識したり、表情や動きから相手の内面を想像している様子が記述されていた。「両方の役割を体験する意義」では、制作したり見守ることで、自己理解や他者理解が深まったことが書かれていた。また両方の役割を体験することで、相手の気持ちを考えやすくなったという内容が書

かれていた。「箱庭制作の感想」では、箱庭制作の楽しさが書かれていた。そして箱庭制作により会話とは異なるコミュニケーションを体験したと感じた者がいたと考えられた。これらのことから、箱庭を作る・見守る体験は、自己理解や他者理解を促進し、また受け止められる体験につながり、同時に他者を配慮しようとする気持ちを促進させたと考えられる。そして両方の役割を担うことで、相手の立場を理解しやすくなると考えられた。また箱庭制作自体が楽しい体験として感じられたことが明らかになった。

4. 総合考察

本研究では箱庭制作を作る・見守る体験を行うことが、学生の自己理解や他者への共感的理解の促進につながるかについて実践的研究を行った。その結果、箱庭制作により、作り手は自己の内面でイメージを膨らませたり、自分について振り返るなど自己理解を促進することが明らかになった。また作った作品を見ることも自分を客観的に見つめることにつながることを示された。

そして箱庭制作を見守る体験は、制作の様子から作り手の内面を想像したり、作品と作り手を関連づけて作り手を理解するなど、他者理解につながると考えられた。また作り手を受け入れよう、共感しよう、配慮しようという態度も促すことが明らかになった。そして見守り手だけでなく、作り手と見守り手の両方の役割を取ることが、作り手への配慮や理解をより促進すると考えられた。また箱庭制作や作品を味わう際に、作り手は見守り手に受け止めようとした、理解しようとした感覚を持ったことが明らかになった。つまり箱庭制作により、相手から受容・理解されるということを実感したと考えられる。また作り手は見守り手に対して「分かってほしい」という気持ちを持ったり、見守り手がいることで安心できると感じることも示された。これらの受容される・理解されるという体験を学生が持つことは、自分が他者を受容・理解するということについても実感として理解しやすくなるのではないと思われる。

このように今回の結果から、箱庭制作は自己理解や他者理解を促進することが明らかになっ

た。また箱庭制作の作り手・見守り手を行うことは、目の前の人の心を大切に考え、相手のために自分がどうすればよいかを考え配慮するという態度の体験的な学びにつながったと考えられた。これらのことから箱庭制作は保育者・教員を志望する学生の共感的理解についての学びとして有効であることが示されたと言えよう。また何より箱庭制作自体、学生にとって楽しい体験であったことが自由記述や箱庭制作後のシェアリングから伺われた。自分の世界に集中し、好きなものを作っていく、そしてそれを誰かに見守ってもらうという体験は、卒業後子どもたちを見守り、支えるような職業を目指す学生たちにとって有意義なものであったと思われる。

引用文献

- 1) 秋政邦江・中山芳一・伊藤智里 (2009) 保育者の共感性向上のためのカリキュラム開発—絵本を教材とした共感意欲向上カリキュラムを中心に—, 川崎医療短期大学紀要, 29, 43-48
- 2) 浅見均 (2000) 保育者の資質に関する一考察—保育現場から見た保育者の資質—, 青山学院女子短期大学紀要, 54, 121-149
- 3) 番匠明美 (2009) 保育者養成コースにおける“表現する”活動の試み (3) 箱庭療法体験の実践より, 夙川学院短期大学教育実践研究紀要, 2, 64-71
- 4) 遠藤歩・安保英勇 (2011) 大学生の箱庭制作の行動分析, 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 59 (2), 113-122
- 5) 久芳美恵子 (2003) 教師のための教育相談の基礎 三省堂
- 6) 藤村和久 (2010) 保育士, 幼稚園教諭を目指

表6 「箱庭を作る・見守る体験をして、感じたことや考えたこと」の自由記述の内容 (抜粋)

自己理解の促進: 改めて自分の気持ちを再確認する機会になった。自分が「こうなりたい」というイメージが自然と箱庭に出ていた。「自分はこういう思いがあるのか」と改めて気付いて、とてもいい体験だった。自分の想像や考えを視覚的に捉えることで、改めて自分について考えることができた。自分と相手の違いや共通点が見つかり、自分自身について、より知れたように思える。箱庭で表現することによって、自分の中にあるもやもやとしたものが整理できたような気がした。

他者理解の促進: 2人組もいつも身近にいない人だったので、見守り手をして新しい一面を見ることができた。見守る体験をすることで自分と人との違いを改めて認識し、相手の気持ちを深く考えることが出来、意外な一面を発見することができた。見守ることを通して相手の気持ちに少しだけ近づくことが出来た。作り手の新たな発見や、意外な一面が構成や物選びの中から見えてきて、相手を理解する一つの方法だと思った。

被受容体験: 一人で黙々と作るよりも、誰かに見守ってもらえたほうが、何だか安心するし、完成した箱庭を見てもらえると、自分の作ったものがきちんと認められるような気持ちになれる。作り終わった時や、作っている途中も見守ってもらっていたので、安心することができた。

相手への配慮・意識: 見守ることを通して、どんな風にすれば作り手は作りやすいのかを考えた。寄り添うようなイメージはしていたが、作り手にとって居ごちが良い空間とは何だろうと考えていた。ただ見守るのではなく、相手の表情や動きを見ながらその人の世界を味わったり、次はどんな風にするんだろうとわくわくしながら見ることが出来て見守り役も楽しかった。

両方の役割を体験する意義: 箱庭を作ることで (見守ることで) 自分の今の心情や相手の心情が分かったり、新たな一面を知ることができるのでとてもおもしろいと思った。作る側と見守る側を体験してみても、自分が作り手だったらどうしてほしいかと考えながら見守ることができたと思う。自分が作り、逆に相手が作るのを見守ることで、普段考えているようで考えていない”相手の思い”を意識することができた。

箱庭制作の感想: 箱庭を作るのも見守るのも、どんな世界ができるのか分からないので、想像しながら作っていくので楽しかった。作り手は自分の世界に入って、自由に作ることでとても楽しかった。想像していた箱庭と違って、やってみるといつの間にかのめり込んでいる自分がいて、楽しんでやることができた。作り始めると、自分の好きなものを選んで、自分のイメージを作りあげていくことに楽しさを感じた。自分のイメージの世界をつくることってこんなに楽しかったんだと思うことができた。会話とは違ったコミュニケーションができたように感じる。

注) スペースの都合上、自由記述の語尾は全て常体に統一した。

- す学生のための保育者の性尺度の構成, 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要 9, 129-143
- 7) 藤岡美紀・石田弓 (2012) 大学生を対象とした箱庭制作後の言語的やりとりの検討—自己理解を促すための質問—, 広島大学心理学研究, 12, 197-216
- 8) 井上清子・石川洋子・会沢信彦 (2006) 子育て支援とカウンセリング (2) 一埼玉県内の保育所の保育者を対象とした調査から—, 文教大学教育学部紀要, 40, 21-29
- 9) 石川暢子・井上清子 (2009) 保育者におけるカウンセリング学習ニーズ—埼玉県内の保育所・幼稚園の保育者調査から—, 文教大学教育学部紀要, 43, 25-30
- 10) 井柳基名 (1996) 保育者の用事に対する共感的理解—共感できる保育者養成の課題, 聖和大学論集, 24, 135-140
- 11) 角田豊 (1999) カウンセリングと共感, 日本教育心理学会総会発表論文集, 41, 53
- 12) 上地安昭 (1990) 学校教師のカウンセリング基本訓練 北大路書房
- 13) 笠井佳代子 (1999) 子ども同士及び子どもと保育者の間に共感的関係を築くための一考察: 保育者の園生活における事例研究を通して, 日本保育学会大会研究論文集 (52), 318-319, 1999
- 14) 木村晴子 (1985) 箱庭療法—基礎的研究と実践 創元社
- 15) 久米禎子 (2011) 2回の連続した箱庭制作における作り手の主観的体験の検討-印象評定とインタビュー分析を用いて—, 鳴門教育大学研究紀要, 26, 213-220
- 16) 楠本和彦 (2013b) 箱庭制作者の主観的体験に関する研究法の検討—多元的方法・方法のトライアングレーション、M-GTA—, 南山大学人間関係研究, 12, 71-94
- 17) 水野節子・武藤夏子 (2004) 自己表現としての箱庭制作の過程(1) 数量的分析と空間布置, 日本教育心理学会総会発表論文集, 46, 626
- 18) 文部科学省 (2006) 幼児教育振興アクションプログラム
- 19) 岡田康伸 (2008) 箱庭療法—ヴァーバル／ノンヴァーバル, 臨床心理学, 8 (1), 20-26
- 20) 小野けい子 (2002) 箱庭療法とその治癒力, 東京国際大学論叢, 8, 13-21
- 21) 鈴木郁子 (2006) 教師の資質向上を目的とした共感研究の必要性, 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 心理発達科学, 53, 85-96
- 22) 鈴木郁子 (2007) 教師の共感性と学校における教師の対人関係との関連—教師対象の質問紙調査から—, 学校心理学研究, 7 (1), 3-10
- 23) 竹松志乃 (2000) 「箱庭制作体験実習」の試み-教職志望学生に対するカウンセリングマインド養成講座-, 明治大学教職課程年報, 22, 29-41
- 24) 千葉千恵美・渡辺俊之・鑑さやか (2006) 保育における子どもの心の理解—虐待アンケートと描画の分析—, 近畿大学豊岡短期大学論集, 3, 89-103
- 25) 津守真 (1979) 子ども学のはじまり フレーベル館
- 26) 若林明美 (2001) 養成校におけるカウンセリング授業についての実態調査, 日本保育学会大会研究論文集, 54, 620-621

謝辞

研究を行うにあたり、調査に御協力していただいた被験者の皆様に深謝いたします。また論文作成にあたりご協力いただいた南九州大学人間発達学部早川純子先生に心より感謝いたします。